

鈴木貞美『「日本文学」の成立』について、小谷野敦がブログに「あらぬことを書いている」と人から教えられて読んでみた。「序文」の「ヨーロッパやアメリカの人文学」という一つの語句をとりあげて難癖をつけている。これが「ヨーロッパやアメリカの(各国「文学」すなわち)人文学」という意味であることは、前後二、三行を読めばわかるはずだ。もちろん、本論で内容を展開してある。小谷野君は、わたしの不注意を咎めるつもりで、これを言っているのではない。鈴木は「同じような本を何冊も出す」とか、『日本の「文学」概念』がまるで理解できなかったとか、述べている。これほど自分の読み書き能力の欠如を自ら喧伝する人も珍しいが、「文化史・文学史の書き変え」や「概念・分析スキームの歴的・地理的相対化」ということが、問題意識にもひっかからない扁平頭を自己暴露しているだけだ。小谷野君は、次のテーマを「読めない男」のセルフ・パロディーにでもするつもりだろうか。

小谷野君が付箋を貼りながら読んだという『日本の「文学」を考える』は、「純文学」対「大衆文学」のスキームが、いつどのように形づくられたかについて調べ、考察した本である。それに対して『日本の「文学」概念』は、それらの上位概念にあたる「文学」の意味の近代における組み換えについて調べ論じた本だった。対象にしている概念の水準がちがうのだ。それがまったく理解できないので、ちょっと眺めただけで「水増し」などと決めつけてしまう。こういう仕事は、おいそれと完結するものでないこともわからないらしい。「純文学」対「大衆文学」のスキームについても、今度の『「文芸春秋」とアジア太平洋戦争』で、ずっと気になっていた菊池寛の用法などについて補い、ようやく、ほぼ完結したと感じているくらいなのだ。なお、『日本の「文学」概念』は、韓国語・英語・中国語(2011予定)で翻訳出版され、英、仏などヨーロッパ諸語、中国、韓国、アラビア語(2010年、レバノン)などで、博士論文をはじめ、多数の論文に引用、参照されていることを申しそえておく。

それらに対して、『「日本文学」の成立』は「日本文学」を焦点にし、「文学」(人文学)の下位概念の「哲学」、さらに下位の宗教学、また「芸術」や「美術」、そして「文学」と横並びの「理学」「工学」「農学」などの編制の日本の特殊性について論じ、かつ北村透谷や幸田露伴らの個別ケースを掘り下げ、また象徴主義文藝の成立と展開について述べ、「自然主義」を基準にした既成文学史を解体再編するストラテジーをはっきり打ち出したものである。これも、中国語訳が有力大学出版社から出ることが決まっている。

なお、帝国大学に農学部がつくられたことについては、19世紀後半のドイツで生物学や化学にもとづいた農学アカデミズムが形づくられ、農学部をもつ大学が増えていたことになったものであること、また大正生命主義と併行するかなり大きな運動がドイツで「生活改善運動」として展開していたこと、この二点について、昨秋、ドイツに行った折に、ハイデルベルクのシャモニ教授から教示を受けた。ここで補填しておく。

わたしが何冊かの新書をふくめ、既存の概念(編制)や分析スキームそのものを対象にして、それらの形成過程を歴史的地理的に相対化し、そして、それらを超えるオルタナティブを提出していることに対して、これまで既存のスキームを疑いもせず、寄りかかってきた人びとが面喰い、とまどいを隠せずにいることには同情しないでもない。それと気づかずに、あるいは、気づかぬふりをして、あいかわらず自分のモノサシで、わたしの仕事を裁断したつもりになる人もいるらしいが、そのモノサシの小ささを露呈するだけだ。わたしの著作に誤記、誤植、ケアレス・ミスが多く残っていることは率直に認める。機会を見つけて訂正してきている。

それにしても、小谷野君に限らず、他人の論考の性格、構成、文脈、含意を考えず、ほんの一部や一文のみ取り出してアゲアシをとったつもりになるテアイが増えている。思考の短絡や一方通行も目立つ。いったい、いつから、なぜ、こんなことになってしまったのか。こちらがとまどうばかりである。

鈴木貞美 (2011/3/10、28)